限りなく粗暴

別府市某区某日の老人大学での会長あいさつの一節。

—「会員の山田さんご夫婦を入院先にお見舞いした折、ばたばたと入って来た看護婦が〝山田のばあちゃん！　山田のじいちゃん！　検温すんだ？〟と言う。私はがまんできず、山田さんとちゃんと姓を呼びなさいと注意した。すると〝山田さん？　オッホホ…〟と言い捨てて出て行った。まともに姓などとても呼べないというのである」。

まことに粗野な看護婦。私方の任運荘では姓にさんをつけてお呼びする。ケース記録など文書記入はすべて敬称をつける。寮母室内の連絡板でも、「山田氏・オカユに変更」などと記し、呼び捨てはしない。お年寄りを大事にすれば自然にそうなってくる。

気の利いた嫁や娘なら、私たち親にはお父さんと言い、彼女らの子に対しては私たちを「おじいちゃん」と呼び変える。私たちはその心配りを喜ぶ。他人からのじいち

ゃん呼ばわりは拒否する。

粗野は粗暴とつながっているから恐ろしい。やはり老人病院、ぬうっと入って来て、病人に口をあけさせ、薬を放りこみ、水を注ぎ、見届けもせず出て行った。たちまち老人は目を白黒、窒息死。その間二分。戦りつの場に居合わせた婦人は声も出せず、事件はそのまま闇の中へ。

管理者が少し気をつければこんな粗野粗暴看護婦は発生しない。お金だけの病院経営では病人の心も身も日に日に蝕まれている。

しかし、言辞の粗暴さは大臣、総理に及ぶ今日ではある。暴言大臣をクビにした総理、お次は総理本人。しかも前者より念入りである。「おそれおののいて」政治をすると美辞麗句を国民の前に並べていたから。孔子の言葉――「巧言令色の人は仁の心に欠ける」。

（一九八六年十月十八日）